



2017/10/20

トンガレポート <7>

青年海外協力隊 シニアボランティア

2016年度 2次隊 卓球隊員 西岡 昌彦

トンガレポート 5 と 6 で卓球の話題をお伝えしました。今回は私の主練習場での活動を中心に卓球の話題を紹介します。

1、TASANOC (Tonga Amateur Sports Association National Olympic Committee)

「トンガアマチュアスポーツ協会 国内オリンピック委員会」通称 TASA (タサ)、私はここを拠点にして主な活動を行っています。これが TASA の全景です。この建物の中に国内オリンピック委員会、パラリンピック委員会をはじめ、バドミントン・卓球・ホッケー・ボクシングなど各競技の協会事務所があり卓球はこの建物中央にある会議用の場所を借りて練習しています。建物は相当古く屋根も継ぎはぎだらけで大雨の日は雨漏りがひどくて練習ができないこともあります。



右が練習場の全景です。中国製の台が3台。

この3台がトンガ国内で一番状態がよいものです。台はいつも出したままのため卓球の練習がない際、いろいろな方々が自由にいろ

いろな使い方(荷物置き、作業、食事、落書きなど)をするため台の表面は傷と汚れがかなりあります。床も写真では光を反射して美しく見えますが実際はほこりと蟻だらけですし、ボールが部屋の隅に行くと蜘蛛の巣に絡まり閉口します。それでもここは「国内オリンピック委員会」の建物であり壁には過去のオリンピックで入賞された選手の写真と成績を記した額縁がいくつも飾られていてそれが多少なりとも私の心を癒してくれます。

2、ナショナルチームとジェシカが存在

これは私が初めてTASAに行った際のナショナルチームメンバーの写真です。忘れもしない最初の感想「うっ、全員裸足!」。トンガレポート4で履物事情についてお伝えしましたが、この国ではビーチサンダルが代表的な履物、時には裸足でも外を歩く彼らにとって屋内ならむしろ裸足の方が快適なのです。しかし彼らはナショナルチームのメンバー、国際大会出場の際にいくら何でも裸足では困ります。ラケットがないとか、ラバーの状態がどうのこうのと言う前に「先ずはここからか、」と感じました。





トンガで昨年の7～12月にニュージーランド人のジェシカが短期で卓球の普及促進と指導者の養成活動をしていたため彼女と5週間活動期間が重なりました。

彼女と相談してそれまで何の規則もなかったナショナルチームに10項目の規則を設けその1番目をシューズ履きにしました。その結果、多少時間はかかりましたが現在TASAで卓球の練習をする

選手は子供たちも含めて全員シューズを履いています。

上の写真の右端がジェシカ。彼女は元ニュージーランド ナショナルチームの選手。高校生の時に半年日本に留学したことがあり日本のことや国民性を理解していたことと、何よりも卓球指導の際に私が使う表現を英語でどう言えばよいかを直接彼女に尋ねることができたので大変助かり感謝しています。写真で私以外は全員「ぽっちゃり」しかしジェシカのプレーは大変上手でした。さすが元ナショナルチーム選手。

右は指導者資格講義を受講したメンバー。ジェシカが講師。ナショナルチームの選手やクラブの指導者に加えほぼ卓球未経験の小学校の先生、アメリカンピースコー（アメリカの協力隊）も参加しました。講義や各人に割り当てられた卓球技術の説明も全て英語でしたのでそれなりに大変でしたが、30時間の



講習後、40時間の指導実務を修了し私は ITTF-PTT Level 1 という指導者資格を取得できました。

ITTF の http://www.old.ittf.com/_front_page/ittf2.asp?category=dev_coach_reg このページの国名欄を JAPAN に変更して検索すると私の登録内容を確認いただけます。



さて、左はナショナルチーム所属のサムエラ君(21歳、学生)を指導中の写真。見てお判りのように体格に恵まれた上、学生だけの陸上競技会の5,000m走で今年全国2位になった体力の持ち主。筋トレやランニングが苦手なトンガの選手の中で唯一彼だけが何でも楽々こなしていきます。

現在は「さらに素早い反応」を課題に練習に取り組んでいます。この体全体を使ってフルスイングしたら煙が出るほど威力のあるボールが出せそうで大変期待しています。第一印象、おっかなそうな顔つきですが優しい青年です。



3、車椅子プレイヤーのシアオシさん

(32歳、手工芸職人)

彼もナショナルチームの一員です。私に来る前は卓球に関する何の知識もなくプレーしていましたが、ボールが飛んでいる間やラバーに当たった瞬間に何が起きるかなどの説明をしたところ目を輝かせてそれを理解し、以降腕を上げています。現在は週3回、1回一時間の練習枠を設けて私が一人で毎回直接指導しています。

写真は視察があったときのものなので球拾い

が付いていますが通常は私しかいません。互いがミスしたボールは全て私が拾うことになります。練習中、私は動きっぱなしになるため一時間が限界です。真面目な選手なのですが時々無断欠席し、その都度私は精神的にダメージを受けます。それを乗り越えて指導を継続しなければならないことが日本で指導する時とは異なる辛さです。

いろいろ指導した中で一番上達したのはブロックです。プレー中彼は移動できないのでどうしても相手の強打を返球する必要があります。ラケットを握る力の入れ具合、角度、相手ボールの着地点を予測する、など教えた結果、今では私がフルスイングしたボールでもうまく返球するようになりました。大変立派なものです。

これも日本とは異なる点ですが、以前は練習中にネットインやエッジボールが起きたときも無言でした。これも国際大会に出場した時に困るため根気よく繰り返しマナーについても説明しました。半年以上時間はかかりましたが今ではネットインやエッジボールのほか、とんでもない方向に返球ミスした時にも自然に Sorry の一言が言えるようになりました。さらに練習内容によって彼のサーブから始まるものがあります。私はその都度、彼の手元に丁寧にボールを渡します。これも以前は無言でしたが私が他の選手にボールを拾ってもらったときは必ず Thank you を言うのでようやく最近になって私が彼にボールを渡す際に毎回 Thank you と言ってくれるようになりました。

日本では当然のことであっても習慣や価値観の異なる相手にそれを理解させるのは至難の業です。折れた心を何度も立て直すパワーと根気強さそして時間をかけて、あきらめずにそれを繰り返すのは大変辛いことです。しかし時間がかかってもシアオシさんのようにその成果が表れた時、日本には味わえない喜び、即ち発展途上国で相手のお役に立てているということを実感できるとともに、私にとっては「やはりこれでよかった」と過去の苦労が宝の時間に生まれ変わります。

シアオシさんには将来、車椅子選手たちの指導者になってもらいたい。最初からそう思って接してきました。残り任期はもう一年ありませんが彼にはできる限りの協力をしてあげようと思っています。

でもシアオシさん、お休みするときは必ず連絡してね！ 携帯電話持っているんだから。。。

今回はTASA で子供たちを指導の様子や第二回全国大会についても紹介できなくなってしまいました。次回以降でそれらをご案内しますのでしばらくお待ち願います。

余談ですが一枚目のTASAの写真で電柱の中央から上部が右に曲がっているのにお気づきの方はいらっしゃいますか。あの電柱は画像のゆがみではなく本当に曲がっています・・・。

